

## 序 本書発行の経緯

井上 健

二〇二三年七月十一日、父が九十二歳で永眠した。その後半生の大半にわたり情熱を注いできたサツマイモ文化史研究の集大成として、一冊の本にまとめて出版することが永年の夢であると生前より公言していた。家族もそれを知っていたので、脳梗塞の発作で入院を繰り返すたびに、「お父さん、早く本を出さないと間に合わなくなっちゃうよ」と発破をかけてきた。それでも当人は、まだ書き足りないことでもあるのか、一向に焦る様子もなく、最晩年まで何かしら調べたり書いたりし続けていた。

二〇二二年一月コロナ禍最中のこと、少しでも出版意欲の刺激になればと思い、私が自作の句集を送るとすぐに手紙が来た。

「二度読みました。次の句が特によかった。へ焼きいもを品定めするシヤネル服」  
「やっぱりサツマイモかと私は苦笑するしかなかった。それでも最後にはこうあった。「ボクのライフワーク『川越いもの文化史』の原稿書き、毎日やっているよ。トシを取ってもやりたい仕事があることを喜びながら」

亡くなる前日に病室の父を見舞った。この数か月間、生命反応はあるものの一言も喋らないので、既に脳機能は停止してしまっただようにも見えた。それでもコロナ禍面会禁止が解除され直接面会できるようになるまでは死なない、と気力で持ちこたえていたように思えた。

心拍・血圧計が生命維持の下限値をたびたび下回るのを見ながら、私は父のむくんだ手を握って語りかけた。

「お父さん、本は俺が完成させるから心配いらないよ」

その時、父の目から一滴の涙がこぼれた。その時の目の動きは、安心したようにも、また怒っているようにも見えた。あるいは「余計なこととはしなくていいよ、あんたには無理だよ」と言いたかったのかもしれない。

家庭内での父親の印象は「飄々として、ずぼら、いい加減」だったが、遺品を整理する過程で初めて気がついた。一見でたらしめに見える本棚や机上の執筆用資料は、意外にも自分の一定の基準で分類整理されていたこと、そして自分が関心を持ったことは何であれ小まめに記録ノートを几帳面に残していたことである。

夥しいノート類が見つかったが、いずれも途中で突然やめている。例えば、長男の私が誕生した際（一九六四年）の日記にはこうある。

「（五月五日）子供の日、もらった五月人形の数々をきれいに飾る。（六月五日）こどもの写真とる。毎月五日に一本とってやろう。（六月六日）五月はずっと風邪気・・・」

風邪気味と書きかけて、突然赤ん坊（私）が泣きだしたのか、電話が鳴ったのか、日記はここでぷつんと終わっている。他の日記や読書記録も同じような調子で、気の向くまま書き始め、飽きると突然放棄している。

最晩年の手書きメモも、てつきり本の追加原稿を書いているものと思っていたら、実際にはその日に食べたものや来客の記録、知人への手紙の下書きなどが大半だった。

本の完成を安請け合いましたものの正直に言えば、散乱した殴り書きの手書きメモをどう整理構成したら原稿を完成できるのか皆目自信はなかった。膨大な蔵書・資料や手書きノート  
の遺品を整理するうち、何とパソコンから二〇二一年七月時点の書きかけの原稿が見つかった。中身を確認すると原稿は八割がた完成しており、一部の情報欠落部分を補いイラスト・写真等を追加すれば何とか書籍としての体裁を成しそうに思えてきた。

それにしても、原稿がここまで完成しているのに、なぜ自分の手で出版しなかったのかは謎のままである。まだ何かを書き足すつもりだったのだろうか。ひよつとしたら調べたり書いたり人に話したりすること自体を楽しんでいただけで、書籍として形を残すことにはそれほど執着が無かったのかもしれない。むしろ原稿が完成した時点で自分の人生が完結してしまおうと思っていたかもしれない。

その後、原稿の欠落情報はほぼ補完できたが、第十二章「サツマイモ資料館での聞き書き」のみはどうしても冗長な印象を拭えず、明らかに未完成と言わざるをえない状態だった。平成十三〜十八年の五年間の記事は欠落し、時系列も乱れていた。内容の大半は、かつて『武蔵野ペン』および日本いも類研究会ホームページに父が寄稿した記事と重複し、しかも本書原稿は推敲前の簡単な日記風メモだった。この章のみは本人も採録すべき記事と編集方針を未だ決めかねていたようだ。聞き書きは父の執筆活動の真骨頂であったし、本書全頁数の約四割を占めているので本章を外すことはできない。ただし第三者がこれを完成させることは不可能に思われた。時系列のみ整え、そのまま並べるほかに手だてはないと私は思った。

しかしながら、本当はどうしたかったのか真意を確認できないまま、当人未校了の原稿を当人の名前で世に出してよいものか、躊躇し、大いに葛藤もあった。

半世紀前のジャズ・レコード名盤に後世の他人が別テイクを勝手に追加して売るとは墓を暴く行為に似ていると言えなくもない。シュールベルトのいくつかの未完成曲について後世の者が補完版を発表して駄作・冒涇の誹りを受けた例もある。

当人は、本書「おわりに」で書いている通り、さきたま出版会（会長・星野和央氏）に本書の出版をお願いすると決めていた。当初はエッセイ風の軽い読み物も想定していたが、単発的な記事ではなく統一性のあるサツマイモ文化史の定本を作りたいことを星野氏から勧められ、本書の執筆に傾注したようだ。星野氏から何度も叱咤激励のお便りを頂きながら、残念なことには遂に自らの手で本書を完成させるには至らなかった。未完原稿の公式販売を望まない遺族の意向を星野氏は快く汲んでくださった。

そして故人のイモ仲間の皆さまにもご相談した結果、無料私家版として発行し、生前親しくお付き合いいただいた友人知人の皆さまにお配りし、併せて日本イモ類研究会のホームページ（<https://www.jrt.gr.jp/>）にも掲載していただけることとなった。

また懸案であった第十二章「サツマイモ資料館での聞き書き」については、「本書が、川越だけでなく、ほかのところの人々にも広く読んでいただけるようになることを願っている」という故人の遺志を斟酌のうえ、サツマイモに関心のある方々にとって少しでも読みやすくなるように、単行本としての完成度を優先することにした。すなわち、かつて『武蔵野ペン』に連載していた「サツマイモ資料館長日記」より約四分の一を転載させていただくこととし

た。その際の対象選定基準としては、①著者自身が想定していたとおぼしきテーマ、②編者を含む一般読者にとっての内容の面白さ、③著者ならではの聞き書きの独自性、④執筆期間全体に亘る各年のバランス、等を考慮した。ただし選集の例に漏れず、本書の選定対象も発行者の主観に偏ったことはご容赦願うほかない。ここに掲載しきれなかった「サツマイモ資料館長日記」の記事は前述の日本いも類研究会のホームページで併せてご覧いただきたい。

本書の企画・編集・発刊にあたり、ご協力いただいた川越いも友の会事務局長の山田英次氏、同会長のベーリ・ドゥエル氏、および一般財団法人いも類振興会理事長の矢野哲男氏、武蔵野ペン編集人の小坂部恵子氏、株式会社さきたま出版会会長の星野和央氏、それに父が芋づる式に知り合った全国・全世界のすべてのイモ友の皆さまに心よりお礼申しあげます。

上記経緯をご諒察のうえ、ひとりでも多くの方に本書をお読みいただき、もし何かのお役に立つことがあれば、遺族一同たいへん光栄に存じます。

本書の底流にあるのは、川越に対する著者の郷土愛、そして二度と戦争が起きないようにという祈りにも似た願いであると思われます。「ボクはいい仲間に恵まれて本当に幸せだ」といつも言っていた父は、残された方々がこの本を読み、何かを感じ、互いに語り合い、楽しんでいただけたなら、きっと許して喜んでくれるに違いないと信じております。

二〇二四年七月一日